

中学校社会科（歴史的分野）学習指導案

1 単元名 「空襲と横浜」

2 単元目標

- ・太平洋戦争の日本様子について意欲的に学習しようとしている。【関心・意欲・態度】
- ・太平洋戦争の様子について、横浜を通して自分なりのイメージをもち、考えをまとめている。

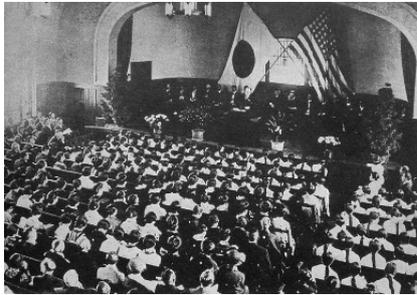
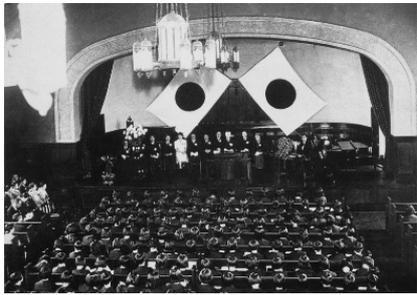
【思考・判断・表現】

- ・太平洋戦争の時期の横浜に関する資料を、適切に読み取っている。【技能】
- ・太平洋戦争の日本の様子について、横浜を通して理解している。【知識・理解】

3 単元について

生徒は横浜について開港当初から「港」を中心に学習をしている。開国による影響、文明開化を経て、貿易港としての臨海部の発展をしていった横浜の歴史を踏まえることで、横浜空襲にいたった理由を理解させる。

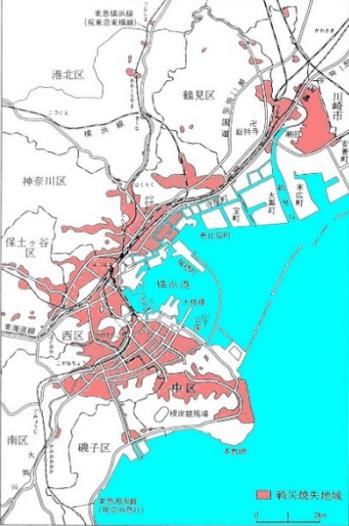
4 指導計画 [2時間]

主な学習活動と内容	主な資料（●）と教師の支援（◇）など
<p>1 国際色豊かな横浜</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開港してからの貿易港としての横浜を理解する。 ・資料を通して、国際色豊かな横浜を理解する。 ・資料を通して、日米関係が変化していくことを理解する。 <p>フェリス女学院新校舎の献堂式（1929〈昭和4〉年6月13日撮影）と創立70周年記念式（1940〈昭和15〉年10月23日撮影）をくらべ、話し合う。</p>	<p>◇横浜の歴史を復習する。</p> <p>●開港してからの貿易港としての横浜を示す資料。</p> <p>●私立学校の講堂の写真</p> <p>◇外国との関わりが深いことを理解する。</p> <p>◇外国（アメリカ）との関係が変化していくことを理解する。</p> <div style="text-align: center;">  </div> <div style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: center;">〈写真集「昭和の横浜」横浜市史資料室〉</p>
<p>2 横浜空襲（本時）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・横浜の空襲がどのようなものであったか理解する。 ・横浜のどの地域、どんな地域が空襲を受けているかを考え、港の重要性に気づく。 	<p>◇横浜空襲を理解する。</p> <p>●上空からの写真（市史資料館）</p> <p>●横浜大空襲体験者手記（市史資料室）</p> <p>◇1945年5月29日の横浜がどのような状況であったかを理解する。</p>

5 本時の目標

- ・横浜の空襲を通して、太平洋戦争を意欲的に理解しようとしている。
【関心・意欲・態度】
- ・横浜の空襲の資料を通して、港町横浜の発展の経緯と重要性を読み取ろうとしている。
【技能】

6 本時の展開

主な学習活動と内容	主な資料（●）と教師の支援（◇）など
<p>・資料を見て、なんの写真か、どこの写真かを考える。</p> <p>・横浜のどの地域、どんな地域が空襲を受けているかを考える。 （生徒につぶやき） S:今でも人が多い中区西区が空襲を受けている。 S:海は煙がなく見やすい。 S:海は空襲を受けていない。</p> <p>・「横浜空襲」はどんなものだったか、どんな様子であったかを資料を読むことで発見する。</p> <p>・資料にラインを引き、横浜空襲がどんなものだったかを挙げていく。 個人で挙げる→グループで共有する。</p> <p>・港湾部は空襲を免れていることに気付く。</p> <p>・港町横浜の港の価値(他国との交流の価値)について改めて考える。</p>	<p>●「いっせいに煙を吹きはじめた横浜」 〈横浜 歴史と文化（横浜市歴史財団編）より〉</p>  <p>◇資料を通して、横浜の中心部が空襲にあったことを理解させる。 ◇アメリカ軍は横浜のどの地域を空襲して破壊しているかを理解させる。</p> <p>●「五月二十九日・・・と私」(空襲体験記) ◇「横浜空襲」の被害の様子を気付かせる。</p> <p>◇資料を読み取ることで、港湾部が空襲を免れていることを考えさせる。</p>  <p>〈横浜 歴史と文化（横浜市歴史財団編）より着色〉</p> <p>◇他国（海外）とつながる扉となる「港」の重要性と横浜の担う価値について気付かせる。</p>

7. 博物館との連携

○横浜市史資料室の「写真でみる横浜大空襲」web版には横浜大空襲に関わる画像資料が掲載されています。学習に役立つものもたくさんあります。児童・生徒の皆さんの意欲がますます高められるように活用してみたいと思います。



B-29 と護衛の P51



爆撃をする B-29



煙を上げる横浜の町



猛火に包まれた横浜



焼夷弾の筒



焼け野原となった町〈手前の駅は桜木町〉

五月二十九日・・・と、私

小野静枝

前 略

－私の空襲体験－

最後に、私の空襲体験をお話させていただきます。私は1932年生まれですから、前年には満州事変が勃発し、正に生まれた時からの戦争世代でした。町をあげての提灯行列(南京陥落、5才)や、旗行列(シンガポール陥落、9才)の覚えもあり、小学校時代は軍国少女で、北支派遣の兵隊さんに、学校から、励ましの手紙を送ったりもしました。其の時、中国やシンガポールでどんな事が起こっていたのか、わかるのは、ズット、ズット後です。

私の家は、港北区大倉山でしたから、富士をめざして上陸したB29の通路でもあり、川崎方面に近いので、1944年の12月ころには頻繁に始まった、軍需工業地帯(京浜工業地帯)の空襲でも、警報がなれば裏山の横穴式防空壕へ、祖父の手を引いて非難しました。寒い冬の夜半「オッショ、オッショ」と、自分に掛声をかけて歩く80歳の祖父の姿は今も忘れません。一晩に2回も繰り返すこともありました。壕のなかでは地響きにおびえ、解除されて外へ出ると、北東の空はいつも真っ赤でした。空襲は日増しに強烈になり、3月の東京大空襲は、一般住宅地域が目標となり、一夜で10万人以上が亡くなりました。更にそうした空襲は名古屋・大阪・神戸へと続きました。

4月には横浜でもかなりの死者も出る空襲が続き、被災者にとってはどれも容易ならぬものであったには違いありません。しかし5月29日の大空襲は、想像を絶するものでした。

5月29日晴れ、B29、500機、P51、100機による昼間の空襲は、僅か1時間10分ほどで横浜の中心部を焼きつくしました。公開された米軍の資料には、五つのポイントを輪番攻撃するという綿密な爆撃計画で、「大成功の空襲」

であったと記されています。

(参考資料『横浜の空襲と戦災』1977、『大空襲 5月29日 1995・今井清一著・有隣新書、他、多書)

当時、私は東急大倉山から、横浜の中心部・中区にあった女学校へ通う2年生で、当時は学校残留世代でした。

3年生以上は動員世代で、前年から川崎方面の軍需工場に動員されて、学校には1・2年生だけでした。先生も若い男性教師は戦地などに召集され、女性教師も動員先に付き添って、教員室は閑散としていました。運動用具等も乏しく、生徒たちは粗末な卓球台で卓球するのが唯一の楽しみでした。数も少ない卓球台は、早出して確保しなければなりません。その朝、その台を確保するのが私の役目でした。「今日は予報が怪しいから、学校へは行くな」という父親の注意も聞かず飛び出し、確保した卓球台で、クラスメイトと警報も忘れて卓球に興じていました。近々、クラス対抗戦も控えていたのです。やがて、回って来られた先生に「B29が、そこまできてるぞ！」と怒鳴られて、学校を飛び出しました。敏速な友は一足早く、市電(当時の乗り物)に飛び乗り、「どんなもんだい」と、腕を曲げてにっこり笑いました(ずっと後に判った事ですが、彼女は其の後、爆撃でやられて返らぬ人となったのです。しかも両親は、あちこちに積まれた死体の山を探し回られたそうですが、遂に遺体も見つけられなかったと聞き「私は許さない」と思いました。)

私が桜木町駅に着くと、私鉄の東横線は停止となり、そうなる私はずっと、省線で東神奈川へ行き、其処から横浜線で菊名へ出、後は一駅を歩くのでした。その日も東神奈川駅ホームで、単線で30分に1本の電車がようやく来て、座席についた頃、ドドッと言う物凄い爆音と共に、ぐらぐらと電車が揺れホームへ飛び出しました。振り向くと、西口駅は火達磨で、天を突くような火煙が凄い勢いで、立ちのぼるのが見えました。それは、大扉風を突き立てたようでした。線

路に飛び降り、柵を越え、東口の広場にたどり着くと、駅前の防空壕は既に満員で、私は入り口の本柱にしがみつくのがやっとでした。振りかえると、さっき迄座っていた電車は、窓という窓、火を噴いて、「オロチのような形相」で目を疑いました。問もなくザザーという轟音がすると、鋼鉄の筒状のものが、ボトンボトンと降り注ぎ、その筒は5、60センチメートルほどもあって、コンクリートの地面につき当たると、生き物のように跳ね、どろどろと何か液体を吐き散らし、ぼっと火がつきました。その数は、たたみ一畳に3本から5本に見えました。それが焼夷弾だったのです。それは、立ち木や板塀、何にでもへばりつくど、火を噴き燃え上がりました。私の足元にも落ち、すぐ右斜め前を走っていた女性に降りかかり「ギャ」と叫んだようでしたが、火達磨となって助けようもありません。

振り仰ぐと煙と煙の間に僅かに見える青空の中を、3機ずつ整然と並んだ9機の機影が、ごうごうと飛び去るのが見えました。それが B29 だったのです。でも、もう其の後は、ザザーという轟音を聞くと、ガード下やどこかの軒先に飛び込み、やり過ぎ、あとはただ逃げるだけでした。第一国道に出たらしく大きな交差点では、車輪も取れ、傾いた馬車を引きずって走りまわる馬が、やがて、自ら、火の中に突っ込んでいくのが見え「何と可哀想な」と、これも焼きついて忘れられません。もう前も左側も煙の渦で、かろうじて、進めるのは右側だけで、私は第一国道を横浜駅方面に向かうようになったのです。そこは未だ、立派な商家が立ち並び、店は開け放されていて人気はなく、店先には、必ず防火用水とバケツが備えてありました。それらは、この火を消すには全く役に立たないものでしたが、熱くなった服や体には頭からかぶり、火の粉を防ぐには助けられました。振りかえれば、火はどんどん追い迫ってきましたから、唯、走るだけでした。やがて上空からはもう、何も降っては来なくなりましたが、広い道路は、渦巻く猛火の対流となって、大きなものをゴロンゴロンと押し流して行くのでした。道路の周囲の家々も火となり、逃げ行く人々の数も少なくなると、あちらこちらに一

列になって、走る人の姿が見え、それは、右方向であったり、全く反対の左方向であったり、すれ違っても判らないようでした。誰かが走りだすと、唯その後について走るのでしょうか。私が行こうとする前方からも、走り来る一団があって、戸惑いました。強風と火の猛威は、増すばかりで、やがて、大きな交差点らしき所まで来ると、全く人影は見えなくなり「もう駄目なんだ」と、私は、しゃがみこんでしまったようでした。其の時でした、交差点の向かいの煙の中から、ふらふらと現れた一人の人影が見えたのです。すると、向こうからも、私を認めたのか、その人影は、そのまま、よろよろと近かづいて来てくれました。大学生のようでした。

彼は、私の傍らに来ると空を見上げて「畜生、畜生」と叫んでいましたが、私に向い、「しっかりするのだ」と云い、手を繋ぐと「もう、決して目を開けてはいけないよ、運を天に任せるんだ」と、渦巻く道路、一国の真ん中へ、突っ込んでいったのです。其の後は全く、時間の消えた時でした。熱いのか痛いのか、歩いているのか浮いているのか、全く意識の消えた時でした。

どのくらいたったのでしょうか。かすかに、涼しい風を頬に感じたようで、恐る恐る、目を開くと、にっこりと微笑む彼の顔がありました。両手を私の肩に置いて「助かったんだよ、もう大丈夫だよ」と。そこは横浜駅東口広場、強制立ち退きで大きく広げられた広場でした。中央辺りには大きな用水池があるようで、其の辺りは避難者の群れか、黒い塊のように見えました。私たちが近づいても誰一人振り向きもせず、動かず、声も上げず、それはまるで、地獄絵のように見えました。やがて広場の周辺は立ち上がるものは総て焼きつくし、地面だけがまだ、盛んに燃えていて、青木橋も高島山も直ぐ其処に見えました。

彼は東京の人でした。「2月の神田の空襲も凄かったよ、代々木の空襲でも逃げまくったから、逃げるのはベテランのつもりだったが、今日は凄かったねー」

と。「海も駄目なんだよ、火は海面をずっと這っていくから、火と水に攻められてしまうからね、公園もだめだよ、生木が燃えてご覧よ、しゅうしゅうとすごいんだから。」など、ぽつりぽつりと、話してくれました。

大通りの真ん中を一筋だけ、1列に歩けるようになると、被災者たちも、もぞもぞと動き出しました。私たちも青木橋に向かい、橋を渡って東神奈川西口方面へ歩き出しました。所々に、全く骨だけになった市電があり、後はまっ平らで、火のすさまじさが、想像されました。反町方面も全く同じで、東横線の高架だけが見えるだけでした。東神奈川駅西口近くまで来ると、あの横浜線の車両も骨だけになって並んでいました。駅前辺りはまだ、燃え盛るところもあったが、六角橋まで来ると焼けない家々が見え「地の果てまで焼き尽くされたのではないか」と、思った私は、妙な気持ちで眺めたのを思い出します。長坂をのぼり綱島街道に沿って歩いていくと、妙蓮寺を過ぎた踏み切り辺りで、川崎方面から心配顔で、戻ってくる動員学徒たちと出会うようになり、間もなく数人の男子学生たちに囲まれました。「よく生きていたね、横浜の街はどう?」と、彼の友人たちのようでした。彼は「横浜は全滅だね、今日はすごかった、自分も死ぬと思ったよ」と。そして、私の髪に静かに手を置くと、「この人と出会って、自分も、生きられたのだと思う」と、つぶやくように云いました。みんな「ううん」と云って沈黙し、未だ、真っ赤に染まる横浜の空を、改めて見つめました。其の時の彼の言葉を、後に私は、何度、思い起こし、噛みしめたことか。

菊名駅あたりにきた時、遠くかすかに我が家がみえました。「家があった」と叫ぶと、彼は「それは良かったね、じゃあ、もう大丈夫だね」と云い、間もなく丁度通りかかった、東京方面に行くという、満員の軍のトラックの後ろに飛びつき、にっこりと笑い、大きく手を振りました。あっという間でした。しかしもう、別れねばなりませんでした。そうしたトラックはすでに、何台か、通り過ぎていたのです。見えなくなるまで、私も手を振りました。

母と姉と小学校の先生の三人に、出会えたのは、そのあとでした。綱島街道はいつもと違い、心配顔で横浜方面に向かう人々の流れと、顔も衣服も真っ黒な北に向かう罹災者の群れで、日暮れても街道は、途切れなかったようでした。漸くその街道から大倉山駅方向、左に曲がると、そこは又、焼け野原で「こんな田舎が」と驚きました。駅前に密集していた商店街と、住宅は跡形もなくくすぶっていて其の先に、なんとか我が家は無事でしたが、庭には、焼夷弾の弾頭が落ちたとかで、池のような大穴が開いていました。それらをちらと見たが、私は布団に倒れこむと、三日三晩、40度の熱を出して起き上がらなかったと聞かされました。

以上が、私の大空襲の体験です。

後 略

横浜市史資料室紀要第6号

「五月二十九日・・・と、私」小野静枝(横浜の空襲を記録する会) より抜粋